

# 音楽的な見方・考え方を働かせる鑑賞の授業づくり ～授業実践からの考察と今後の課題～

教科指導重点コース 造形・創造科学系  
吉川重輝

## I はじめに

### 1 音楽科に求められていること

中学校音楽科における目標は、中学校学習指導要領解説(平成29年告示)によれば、「表現及び鑑賞の幅広い活動を通して学習が行われることを前提とし、音楽的な見方・考え方を働かせた学習活動によって、生活や社会の中の音や音楽、音楽文化と豊かに関わる資質・能力を育成することを目指すこと」とされている。つまり音楽科の学習は、音楽的な見方・考え方を働かせた活動が行われることが前提として求められていると言える。

「音楽的な見方・考え方」については、「音楽に対する感性を働かせ、音や音楽を、音楽を形づくっている要素とその働きの視点で捉え、自己のイメージや感情、生活や社会、伝統や文化などと関連付けること」とされており、学習活動の中で、音楽を形づくっている要素とその働きの視点をもって取り組むことが求められていることが分かる。

「音楽に対する感性」とは、「音や音楽のよさや美しさなどの質的な世界を価値あるものとして感じ取るときの心の働きを意味している」と説明している。生徒が音や音楽を主体的に捉える中で、音楽を形づくっている要素の知覚・感受を支えとして、自ら音や音楽を捉えることで「音楽に対する感性」は働くと考えられている。

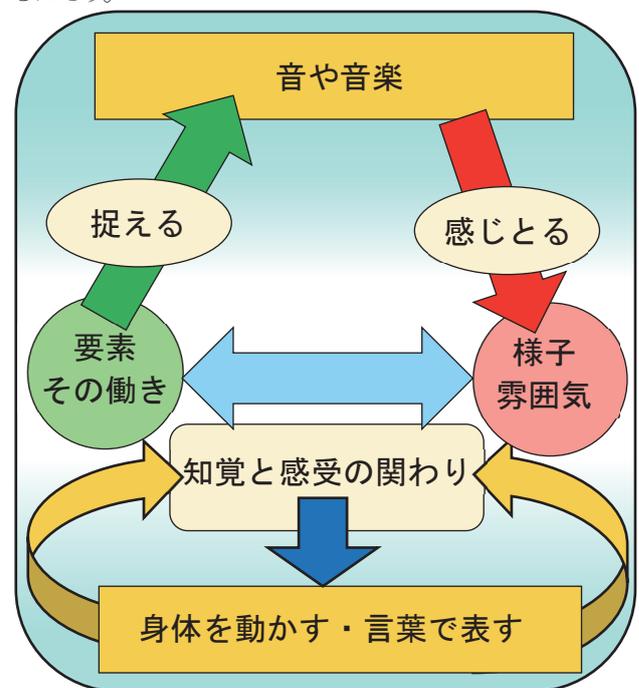
これらを踏まえると、音楽科の学習において、生徒が音や音楽を、音楽を形づくっている要素の視点で捉えることは、充実した学習のために必要不可欠であり、その支援は授業をデザインする教員にとって優先度の高いことであろう。生徒が音や音楽から感受した様子や雰囲気について、知覚した音楽を形づくっている要素の視点をもって主体的に関わっていく、「音楽的な見方・考え方を働かせる」学習活動の実現のために、教員は授業を改善していくことが求められている。

### 2 知覚・感受力の育成

中学校学習指導要領によれば、音楽科の表現領域・鑑賞領域に共通する指導事項として「音楽を形づくっている要素や要素同士の関連を知覚し、それらの働きが生

み出す特質や雰囲気等を感じながら、知覚したことと感受したこととの関わりについて考えること。」が挙げられている。音楽科で子どもたちに求められることは、子ども自身が主体的に「音楽的な見方・考え方」を働かせることによって得られる知覚と感受であり、その関わりについて思考するように促すことが指導事項として求められているのである。

この知覚と感受の力を育てるためには、子どもの能動性が必要不可欠である。そのため、教師は対象とする要素や要素同士の関連に、子どもが注意を向けざるを得ないような場を設定する必要がある。しかし、子どもが能動的に音や音楽と関わったとしても、子ども自身が、自分が知覚・感受しているのか曖昧になってしまえば、時の経過とともに忘れてしまう。そこで、知覚・感受した内容についてアウトプットする活動を行うことが大切であり、言葉で発言する・身体を動かす等の様々な活動が考えられる。こうした場の設定や活動内容の選定は授業デザインと直結するため、知覚・感受力を育成する上で、教師が授業改善を行う上で考慮すべき項目の一つと言えるだろう。



【音楽的な見方・考え方を働かせた学習のイメージ】  
(筆者 制作)

### 3 鑑賞領域に求められていること

中学校学習指導要領によれば、鑑賞領域の指導内容について、第一学年では以下のように記載されている。

- (1) 鑑賞の活動を通して、次の事項を身に付けることができるよう指導する。
- ア 鑑賞に関わる知識を得たり生かしたりしながら、次の(ア)から(ウ)までについて自分なりに考え、音楽のよさや美しさを味わって聴くこと。
  - (ア) 曲や演奏に対する評価とその根拠
  - (イ) 生活や社会における音楽の意味や役割
  - (ウ) 音楽表現の共通性や固有性
- イ 次の(ア)から(ウ)までについて理解すること。
  - (ア) 曲想と音楽の構造との関わり
  - (イ) 音楽の特徴とその背景となる文化や歴史、他の芸術との関わり
  - (ウ) 我が国や郷土の伝統及びアジア地域の諸民族の音楽の特徴と、その特徴から生まれる音楽の多様性

ア- (ア)によれば鑑賞領域における子どもの思考は、知覚したことと感受したこととの関わりについて考えることはもちろん、考えたことの根拠についても考えることが求められている。

そこで、鑑賞領域における活動として、知覚・感受したことのアウトプットが重要となる。日本学校音楽教育実践学会(2010)によれば、「作品にみられる音楽の諸要素を知覚し、それらの組織化から生み出される質やイメージや感情を伴って感受したことを、身体や批評文によって外部世界に生成することで、知覚・感受・イメージ・感情といった内部世界を生成する。」とされている。ここでいう内部世界とは自己の経験であり、外部への生成を経て意味が具体化されるとしている。言い換えれば、授業活動でアウトプットを行うことで子どもの思考は再整理されると言える。

また、授業活動でアウトプットされたものによって仲間との交流が生まれるため、自分には無い考え方と出会うきっかけとなる。新たな考え方や聴き方の視点を得ることは、新たな発見に繋がる可能性が高まるため、知覚・感受の深まりに働くことが期待できるであろう。これは新学習指導要領における「学びに向かう人間性」に通じるものでもあり、音や音楽と関わる中で考えたことを交流する機会は積極的に設定していくべきだと考える。

意見を交流する場においては、指導項目にもある通り、根拠を明確にした自分の考えが必要になる。知覚・

感受したことをもとに考えた批評を行うことで、音楽的な見方・考え方が働くと考えられる。授業活動に自分の考えを人に伝えようとするような活動を設定し、意見を交流する活動を経ることで、妥当性をもった批評へと繋げていくことが大切であると考えられる。

考えの根拠を明確にしていくことは、理解が深まることに関連する。イ- (ア)では、曲想と音楽の構造との関わりについて理解するとしている。曲想とは、感受した曲の特質や雰囲気のことを指し、音楽の構造とは、音楽を形づくっている要素や要素同士の関連のことを指す。これらの関わりについて考え、根拠を明確にすることこそ、「音楽的な見方・考え方」が働く活動であり、「考える」ではなく「理解する」としていることから、その重要性が伺える。曲想と音楽の構造との関わりについて理解することは、知識としての定着である。この知識を他の学習の際に視点として役立てることで、ア- (ウ)に挙げられる「音楽表現の共通性や固有性」を考えることができる。

こうした点を踏まえて筆者は、鑑賞領域の授業において、子どもが「音や音楽を形づくっている要素の視点」で音楽を捉え、「知覚したことと感受したこととの関わりについて考える」だけでなく、「考えたことの根拠」を明確にし、それらを身体や批評文等によって「アウトプットする」ことを重要視したいと考える。

### 4 主題設定の理由

音楽科は歌唱・器楽・創作からなる表現領域と、鑑賞領域に分けることができるが、どの分野においても音楽的な見方・考え方を働かせることは必要である。一つの領域に限られた視点ではなく、複数の領域において、「音楽を形づくっている要素とその働き」の視点で捉え、学んだ内容を活用していくことが重要である。例えば、鑑賞領域で知覚した音楽表現について、表現領域における創意工夫へ活用することが挙げられる。具体的な例を示すと、「前回の鑑賞では、同じ旋律の繰り返しに強弱の変化を伴うことで、会話のように聞こえると考えた。今回の合唱曲ではパートのかけあいをより魅力的にするために、強弱の変化を工夫しよう。」等が考えられる。

しかし、新型コロナウイルス感染症の影響により、飛沫感染が課題となる歌唱や器楽におけるリコーダーは、授業の実施が難しく、実習校では創作分野に集中したカリキュラムが設定された。創作分野は短時間での完了が非常に難しく、限られた授業実践時間の中で研究視点を明確にする目的も含め、鑑賞領域に限定した授業改善を今回の研究主題とした。

## II 教師力向上実習 I における授業実践からの課題

### 1 授業実践の概要

対象:A 中学校(名古屋市)1年生  
 分野:鑑賞  
 教材:動物の謝肉祭より「白鳥」(サン=サーンス作曲)

- (1) 楽曲の冒頭部分の演奏を聴き、自由な感想を記述する。
- (2) チェロとピアノそれぞれのみの演奏音源を聴き、「どんな感じがしたか」と「どこから(何から)感じたか」の2つの観点について記述し、意見を交流する。
- (3) 再度、声部の揃った音源を聴き、(2)で扱った2つの観点について記述し、意見を交流する。
- (4) 「チェロ」「ピアノ」「重なり」の三語の使用を条件とした、楽曲の魅力を紹介する批評文を作成する。

### 2 手立て

#### (1) 楽曲を聴いた感想を書き留める

「楽曲の感想を書く」という活動は、音楽から受けた直感的な印象を書き留めることであり、そこに音楽的な見方・考え方が働いているかどうかは、生徒の思考に委ねられている。たとえ音楽的な見方・考え方が働いていなくても、楽曲から感受したことをその場で書き留めることに意味があると筆者は考えている。

なぜなら、自らが楽曲を聴いて感じたことは、音楽が流れるその瞬間に生まれる思考であるが、楽曲の内容を覚えていない限りは、時間の経過とともに印象が薄くなっていくか、もしくは忘れてしまうためである。また、授業活動を通して様々な視点をもつことで、楽曲の感じ方は変化していくだろうと考えられる。そこで、最初に聴いて感じたことを書き留めることで、自身にとっての楽曲の価値が整理され、内面的なイメージが文字として表出する。授業が終わった段階で、初めに考えたことが文字として残っていることで、子どもの思考の変化や根拠を探る手がかりとなると考えた。

#### (2) 楽器ごとの視聴とワークシートの工夫

視聴時間の限られた授業の中で、数ある要素から生徒が自ら抽出した観点で魅力をまとめることは難しいと考えられる。そこで2つの楽器からなる本教材を楽器ごとに分けて視聴することで、それぞれの旋律や音色を知覚した上で楽曲と向き合うことができると考えた。「どんな感じがしたか」と「どこから(何から)感じたか」を問う場面では、ワークシートの空欄を隣り合わせにし、左右に関

連させて記入できるようにすることで、子どもの知覚と感受の視覚化を計った。

#### (3) 再度の経験と板書の工夫

改めて声部の揃った音源を聴く際には、知覚した旋律や音色を材料に「音楽を形づくっている要素の視点」で捉え、初回の感想やイメージと関連づける姿を期待した。もし初回とは感じ方が異なるのであれば、それは楽器別の鑑賞によって知覚したものが働いた結果であると考えられる。また同じ感想であったとしても、どこから感じたかを考えることで、子どもなりに根拠を探る活動になると考えられる。

また意見の交流の場では、板書をワークシートと同じように、「どのような感じがしたか」と「どこから(何から)感じたか」を隣り合わせの表の形で作成し、子どもの発言をそれぞれの位置を対称させて板書することで、それぞれの関わりについて視覚的に理解しやすくなると考えた。【資料1】は、実際の授業実践での板書の一部である。A・Bはチェロ・ピアノのそれぞれの音源を、Cは、再度声部の揃った音源を視聴する際の活動を指している。例えば、Aにおける「さみしいと低い音」がこれに当たる。

資料 1		どのような感じ	どこから(何から)
A	青静か さみしい 気持の変化	悲しみ 暗い	音の高さ 低い音
B	リズムカル 単語 家族のぶん	気持ちいい いきいき	はまりしない ときめかない ×ロテ
C	ほなやかさ 言わねえ よりよ、てる	あったかい	音量 音かおる 音量の変化

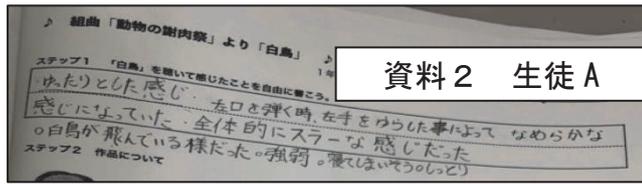
#### (4) 批評文の作成における使用語句の指定

紹介文(批評文)の作成において、子どもに与える課題は「楽曲の魅力を紹介する」ことであり、具体的にどのような魅力があるかを思考することが求められる。そのため、音の重なりや強弱の変化といった「音楽を形づくっている要素とその働き」の視点で捉えることが必然と求められる。そこで、「チェロ」「ピアノ」「重なり」の三語の使用を指定することで、テクスチャに着目することを誘導し、知覚した旋律や音色が楽曲に対してどう働きかけているのかを思考することができると考えた。

### 3 結果と考察

#### ① 生徒 A のワークシートより

##### (1) 感想の記述



資料2 生徒 A

【資料2】は、生徒 A のワークシートの前半部分であり、楽曲の感想の記述である。彼は、楽曲の印象を「ゆったりとした感じ」と表現している。またチェロの演奏について、「なめらかな感じ」と表現するとともに、それはビブラートに起因すると考えていることが読み取れる。そのゆったりとした・なめらかな感じを「スラー」という音楽用語を用いて表現している。また、メモ程度ではあるが何かしらの「強弱」に特徴があると考えたことも推測できる。

##### (2) 楽器ごと・再度声部が揃ったの視聴

資料3 生徒 A	
ステップ3 比べてみよう OA, B, Cの演奏を聴いて、どのような感じがしたか、どこから(何から)そのような感じがしたか、言葉で表そう。	
どのような感じがしたか	どこから(何から)そのような感じがしたか
A ゆたりのした感じ 興奮する感じ 〇寂しい 〇追いつめられている	スラーで少しゆっくりな所 高音で音が震動する所 〇だけ1つ 〇低い音
B 少し暗い感じ	高音から半音位下がった所へ 変わった所
C ミステリアスな感じ 〇BGMとして良さそう	黒鍵で弾いている所 〇メロディがない
左の音階の強弱が 分かりやすい 興奮する感じ	ピアノが繰り返しに なっている所 ピアノとチェロの両方が高い音を出している所

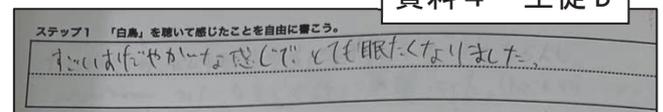
【資料3】は生徒 A のワークシートの後半部分である。A の記述を見ると、【資料2】でも記述していた「ゆったりとした感じ」が、チェロの演奏から感じ取っていることが分かるとともに、具体的に演奏のテンポがゆっくりである所と関連があると考えていることが分かる。また彼はビブラートについても考えたことが感想から読み取れたが、ここではビブラートに「高音」という要素が複合することで、「興奮する感じ」を生み出していると考えている。

B の記述では、「高音から半音くらい下がった所」や「黒鍵で弾いている所」と、具体的な音の高さについて触れており、これらから「少し暗い感じ」や「ミステリアスな感じ」という雰囲気を感じたことが分かる。

そして C の記述では、ピアノにはメロディが無いということを知ったことで、感想の段階ではメモとして残っていた「強弱」について、チェロの一言一音の「強弱」は、ピアノと同じ音形を繰り返すことで強調されていると考えたことが推測できる。また A の時点で「興奮する感じ」と記述したことについても、「ピアノとチェロの両方が高い音を出している」ことによって生み出されていると考えたことが読み取る。これらを踏まえると生徒 A は、チェロとピアノのそれぞれの音源について、感じ取った雰囲気がどのような音楽的な要素に起因するかを考え、再度声部が揃った音源を聴いた際には、それぞれの声部がどのように関わっているか、「テクスチュア」の視点で楽曲を捉えていると考えられる。

#### ② 生徒 B のワークシートより

##### (1) 感想の記述



資料4 生徒 B

【資料4】は生徒 B の楽曲の感想の記述である。彼は生徒 A ほど具体的ではないものの、楽曲の印象を「おだやかな感じ」と記述し、また「眠たくなる」ともしている。

##### (2) 楽器ごと・再度声部が揃ったの視聴

資料5 生徒 B	
ステップ3 比べてみよう OA, B, Cの演奏を聴いて、どのような感じがしたか、どこから(何から)そのような感じがしたか、言葉で表そう。	
どのような感じがしたか	どこから(何から)そのような感じがしたか
A おだやかな感じ 〇冷たい感じ	チェロが弾いている時の、重たい感じがした
B 弾むようなステップが 感じ、明るい感じ	ピアノの高い音と、ちびちび落ち着いている感じがした
おだやかな感じ、でも少し暗くなるような、不思議な感じがした	チェロの響きもピアノの響きも落ちて、安心感をもたらしつつある感じがした

【資料5】は生徒 B のワークシートの後半部分である。A の記述を見ると、【資料4】でも記述していた「おだやかな感じ」について、チェロの演奏のビブラートから感じ取っていることが分かる。また感じ取った様子について、「重い感じ」と「冷たい感じ」という感想が追加されている。

B の記述では、「ピアノの高い音」という音の高さについて触れており、「落ち着いてるような感じ」と書き表しつつ

も「弾むような、ステップをふんでる感じ。明るい感じ」とも記述しており、感じたことに対する考えが揺らいでいることが読み取れる。

Cの記述では、Aで指摘していたビブラートについて、「チェロの震えもピアノの音と交ざり合って、安心感をもたらしているように感じた」としている。チェロの音について知覚した要素が、ピアノとの重なりによって生み出される特質や雰囲気について考えていると言えるだろう。また【資料4】と共通する表現として「おだやかな感じ」を使用しており、そして「子守唄みたいに感じた」という表現が追加されている。生徒Bは、チェロの音が震えているという特徴から、穏やかであると同時に暗く冷たいと考えていたが、授業を通して、ピアノと合わさることで安心感をもたらすようになるようになったと推測できる。最初の感想で眠たくなると感じたことも、穏やかでありつつ安心感をもたらすことから子守唄のようであると表現し、具体性が増していると分析することができる。

### ③ 考察

ワークシートの記述の例として生徒A・Bの記述を紹介した。このように、多くの生徒が「どのような感じがしたか」「どこから(何から)感じたか」の2つの観点について、記述をすることができた。中には矢印で結ぶ・段を区切るなど、感受した内容に対する根拠を明確に示していると考えられる生徒も見受けられた。流れるような感じがする・作業をしている感じ等の「曲や演奏に対する評価」と、音の高さの変化・リズムが一定等の「その根拠」について考える活動を展開することができたのではないかと考えている。

改めて声部の揃った音源を聴く際には、チェロとピアノそれぞれについての指摘を述べる生徒や、具体的な箇所についての指摘も見られ、こうした生徒は「チェロとピアノの重なり」という「テクスチュア」の視点で、楽曲を捉えることができていると考えられる。また、「どんな感じがしたか」と最初の感想の共通する表現によって、自らが価値つけた楽曲のよさや美しさについて、授業を通して音楽を形づくっている要素の視点で考える生徒の姿が見られたのではないかと考えている。

批評文の作成においては、チェロとピアノについて音の高さや強弱などの要素を用いて説明し、その重なりが楽曲のどんな雰囲気につながっているのかを記入する生徒が大半であった。これは、「曲想と音楽の構造との関わり」に対応していると言える。

この授業実践では、楽曲の声部を分けて聴くことで、それぞれの声部に対する印象や理解を整理することに働いたことが予想できる。それぞれの声部の音色や旋律を理解した上で楽曲を再度鑑賞することで、ピアノの音に対してどう働いているのか・チェロの音の長さや伴奏の形の関係等、楽曲を構造的に聴くことに寄与したのではないかと考えられる。

## 4 課題

### (1) 意見交流における課題

教師と子どもとの間、あるいは子どもと子どもの間での交流の際の情報伝達に課題が残った。授業実践を進行するにあたって、子どもの抽象的な発言と楽曲の具体的な箇所を照合させることが難しかったのである。例えば、子どもが「一つだけ長い音がある」と発言したものは、チェロの旋律の終わりを示していると推測することができるが、「音が小さいところと大きいところ」と発言したものは、具体的な箇所の推測が難しい。教師からどこかを尋ねても、子どもにとっては「音が小さいところと大きいところ」であるため箇所の特定に繋がらない。当然、学級全体での交流も抽象的になるため、理解に繋がる可能性は低くなってしまふ。そのため、楽曲や音という目に見えない情報を、視覚的に理解できるものを通して交流する必要があると感じた。

### (2) ワークシートから読み取れる課題

楽器ごとの音源を聴く際に、「どんな感じがしたか」と「どこから(何から)感じたか」を分けて記述すること、再度揃った音源を聴く際に、知覚したそれぞれの楽器に関する要素の視点で音楽を捉えることで、知覚したことと感受したこととの関わりについて考えることができるとした。しかし、中には「曲全体」や「なんとなく」といった、音や音楽を形づくっている要素の視点で鑑賞しているとは考え難い生徒が見受けられることも事実である。

資料6		どのような感じがしたか	どこから(何から)どのように感じたか
1部	A	やさしい感じ	ゆったりとしたリズムから
2部	B	なめらかな感じ おだやかなりはおだやかなり	音
3部	C	やさしい	音

【資料6】は、その一例である。Aにおける「やさしい感じ」を「ゆったりとしたリズムから」とは記述しているものの、BとCに関しては「音」としか記述しておらず、要素の視点で音楽を捉えているとは考え難い。特に、Cの記述が簡素であることから、知覚したことと感受したことの関わりについて考えたとは言えないと判断される。

こうした生徒は、耳に入ってくる楽曲を二つの楽器の重なりとして構造的に聴くに至らなかったことが推測される。声部ごとに聴くという活動が、構造的に聴くことに繋がっていない可能性も視野に入れる必要があるのではないかと考えられる。

### (3) 授業で扱う構成要素としての課題

それぞれの楽器について知覚した後に再度声部が揃った音源を聴くことで、「チェロとピアノの重なり」という「テクスチュア」の視点で、子どもが楽曲を捉えることができていると考えた。たしかに、子どもはチェロとピアノについての説明や重なりが与えた楽曲の雰囲気への影響について記述している。これを「音楽的な見方・考え方」がどのように働いたのかという視点で分析しようとした時、子どもが着目した要素が音色なのか、あるいは旋律なのかといった判断が難しいことが課題となった。

資料7 生徒C	
どのような感じでしたか	どこから (何から) そのように感じましたか
A 音はめらんで聞き取りやすい 優しい感じ 左の音は弾き方があると 響き、密着感がある。	音の高度の和り変わり 左の独奏 音の強弱(はた)
B 音に規則性を感じた。 落ち着いてかじらない	曲のリズムが一定したこと 同じ音を繰り返しているように 聞かされている。
C AやBに比べて比較的音楽(曲)って感じがする	複数の楽器が演奏していて、 それぞれの楽器の音の特徴が 生かされていたこと

【資料7】は、生徒Cのワークシートの一部である。生徒Cは、AとBに関しては、音楽を具体的な要素の視点で捉え、感受したこととの関わりについて考えていることが伺える。しかしCは、「それぞれの楽器の音の特徴が生かされていた」と記述している。チェロとピアノの音の特徴、つまり音色について知覚していると考えられるが、その重なりの効果についてどう考えているかの推測が難しい。また、感じた様子についても「AやBに比べて比較的音楽(曲)って感じがする」と、具体的とは言い難

く、彼の「テクスチュア」の視点を分析することが出来なかった。

ワークシートの分析は、子どもの記述から見えてこないという教師の一方的な都合であり、子どもが「テクスチュア」について考えていないとは言いきれない。しかし「どこから(何から)感じたか」という問いは、生徒の感性に委ねられている性質が強く、【資料6】のような簡素な記述が出てきてしまうことについても、曖昧な問いが原因であるとも考えられる。言うなれば、授業で扱う構成要素の焦点が、音色の重なりなのか、あるいは旋律の重なりなのか、あるいはそもそも曖昧だったのではないかと振り返る。要素同士の関わりについて考えることももちろん重要なことではあるが、まずは一つの要素に焦点をあてる必要があったのではないかと課題に感じている。

## III 教師力向上実習IIにおける授業実践

### 1 教育実習生の授業実践の支援

教師力向上実習II(以後、実習II)の期間中、他大学の学生の教育実習が重複した。指導教員から授業実践の指導案作成への協力を依頼されたため、共同して授業案を作成することになった。実習IIの期間は、もう一人別の実習生とも重複し、2人の実習生の授業実践時間やその準備時間を確保するため、自分の授業実践の実施は難しい状況であった。そこで、共同して指導案を作成することで、授業者にこそならないが、筆者の意図を踏まえた授業構想を考えることができた。

ファゴットの非常に高い演奏技術をもつ先生であったため、生の音を生徒に聴かせたいという指導教員の意向もあり、「ファゴットの演奏を聴く」ことを踏まえた授業とすることが条件であった。自分の研究課題である鑑賞領域の授業改善の経験の一つとするため、鑑賞の授業を提案し、1時間で完了する授業案を共同して作成した。

### 2 実習Iでの課題を受けて

実習Iでの「白鳥」の鑑賞から得られた課題の一つが、「音色と旋律のどちらに注目しているのか」であった。そこで今回は、どちらかが全く同じものを比較する内容にすることで、注目する要素を絞ることができると考えた。ファゴットで演奏される様々な旋律を鑑賞して、その特質について考える授業も魅力的ではあるが、せっかくファゴットを用いる強みが薄れてしまう。あまり生演奏で聴くことはできないファゴットの音色について考える授業は、そう簡単に実践できることでは無いため、音色に注目した授業を構想することにした。

### 3 授業実践の概要

対象:A 中学校(名古屋市)1年生  
 分野:鑑賞  
 教材:無伴奏チェロ組曲第一番より「プレリュード」  
 (バッハ作曲)他

- (1) ファゴットで演奏される「無伴奏チェロ組曲」を聴き、自由な感想を記述する。
- (2) ファゴットの構造や音の出る仕組み等について知る。
- (3) ファゴットとチェロそれぞれの演奏を聴き、「感じとった音楽の特徴と情景(感じ・雰囲気・様子)」について記入し、意見を交流する。
- (4) 管弦楽の楽曲の中でのファゴットの演奏を聴き、役割について考える。

筆者の意図は主に(3)の活動に反映されている。「無伴奏チェロ組曲」のファゴット演奏を A、チェロ演奏を B として比較聴取し、その違いを交流した。「A と B の演奏で違うものは何か」→「音色が違う」という事項を先に教師が整理し、「感じとった音楽の特徴と情景」についてワークシートに記入した。この際のワークシートは A と B が隣り合わせになる表形式で、授業の板書も同じ形にすることを提案した。

### 4 授業の記録と考察

筆者が授業を観察して作成した授業記録をもとに、実施したクラスごとの意見を以下のようにまとめた。

#### (1) A クラスでの意見

A	B
ぎこちない、楽しげ 一音一音が聞き取りやすい、メリハリがある 安っぽい 明るい 音が全体的に高い 軽やか	響いて、改まっている 一音一音が繋がっている、ネバネバしている 上級貴族って感じ 厳か 音が全体的に低い 重々しい

#### (2) B クラスでの意見

A	B
一つ一つの音が繋がろうとする 爽やか、軽い 震える感じの音 優しく、おだやか 落ち着いていて、暗い	全ての音が繋がっている ねっとり、厚み、重み 音が跳ねるけど深い 鋭く、壮大 なめらか、明るい

### (3) 考察

今回の授業は、全く同じ楽曲を、異なる楽器の独奏の演奏を比較するという内容であり、異なる音楽を形づくる要素は「音色」に絞られた環境であった。ファゴットとチェロの音域は、厳密には違うがおおよそ同じであり、楽譜で示される音の高さは同じである。しかし、ファゴットの方が音が高く、軽い・チェロの方が音が低く、重いといった感想が共通する点が興味深いと感じた。生徒の記述する「音の高い・低い」はヘルツで表すことのできる単純な高さではなく、音色の違いによる別の次元を示している可能性があると考えられる。

楽曲の感想との関わりといった、知覚と感受の関わりについて考えることは今回の授業では無かったが、「音色がどう違うのか」と「曲想がどう違うのか」について深めることで、音色という要素がもたらす働きについて考えることができるだろうと考えた。

## IV 教師力向上実習Ⅲにおける授業実践

### 1 研究仮説

- 楽譜等の視覚的な情報を掲示することで、意見交流を具体的に進行することができる。
- 声部ごとに聴く活動のみでは、楽曲を構造的に聴くに至らない可能性があるため、その他の活動を展開する必要がある。

### 2 研究仮説に迫るための手立て

#### (1) 掲示物の使用

本研究では、中学1年生の鑑賞教材である「平調 越天楽」を題材に実践を行う。雅楽は西洋の五線譜が用いられる訳ではないため、正式な楽譜がある訳ではない。教育芸術社の教科書は、各楽器の演奏されるタイミングをイラストで表し、吹物の旋律について五線譜で示した絵楽譜が掲載されている。この絵楽譜を拡大印刷したものを【資料8】を板書として掲示することにした。

**資料 8**

耳に入ってくる音楽が、実際に絵楽譜の通りになっているか照合することで、「もうすぐ太鼓の音が聞こえるはず」といった聴き方をすることができると考える。また、今どこが演奏されているのか分からなくなってしまうとしても、教師が板書を用いて示すことで把握することができる。数十秒あるいは数分間の聴く活動が、探す・照合するといった意味合いを兼ねる活動になることが予想される。

## (2) “歌う”・“数える”活動を取り入れる

「テクスチュア」を題材として扱う以上、音の重なりを捉えることが重要となる。音の重なりを知覚するためには、ある音に対して加わった・重なったという、基準となる音を知覚している必要がある。「平調 越天楽」は竜笛の独奏で始まった演奏に、打物や他の吹物が重なって展開される。そこで、基準となる竜笛の旋律を知覚することが重要だと考え、旋律を知覚するための手立てとして唱歌を歌う活動を設定する。体験的に唱歌を歌うことで旋律を知覚し、再度楽曲を鑑賞する際に構造的に聴くことに働くと考えた。

また、再度楽曲を鑑賞する際の活動を、「竜笛以外の楽器がいくつ(何種類)あるか数えてみよう」と設定し、基準となる音以外の音に注意が向かうように促す。「笛以外の音が鳴った」「違う笛が同時に鳴っている」といった反応は、音の重なりを知覚したものであり、それぞれの楽器に関する要素の視点で楽曲を捉えることに働くと考えた。

## (3) 子どもが対象を決定し、意見を交流する。

今回の実践では、楽器ごとの音源を聴いた後の活動を、「竜笛以外の、一番印象に残った楽器についてメモしよう」とし、自分で楽器を一つ決めて、感じ取った音楽の特徴を記述する活動とした。前実践では「どう感じたか」と非常に抽象的な問いであったが、今回は自ら楽器を抽出する課題を与えることで、音色の違いに準じた思考が必然となると考えた。

また、考えたことについてグループで交流する場を設けることでアウトプットする機会を与え、自分の考えの根拠を明確にしていくことができると考えた。その際、ワークシートに他の生徒の意見を記入する欄を設け、ただ聞いて終わるのみにならないように改善した。自分とは異なる視点の意見を書き留めることで、新たな見方・考え方を受け入れ、再度鑑賞する際に考えが再整理されることを期待した。

## 3 授業実践の概要

対象:A 中学校(名古屋市)1年生

分野:鑑賞

教材:「平調 越天楽」

- (1)「平調 越天楽」の冒頭を聴き、自由な感想を記述する。
- (2)雅楽の歴史を知り、竜笛の唱歌を体験的に歌う。
- (3)再度楽曲を聴き、竜笛以外でいくつ楽器が使われているか予想し、意見を交流する。
- (4)拡大した絵楽譜を掲示し、8つの楽器が使われていることを、音源を流しながら確認する。
- (5)楽曲に使われている楽器ごとの演奏資料を視聴し、楽器の名称を確認する。
- (6)再度楽曲を聴き、一番印象に残った楽器と感じとった音楽の特徴を記述し、意見を交流する。

## 4 結果

### (1) 視覚的理解の効果

絵楽譜の使用は、視覚的理解に大いに働いたと実感している。いくつ楽器が使われていたかという問いの答えを発表する形で絵楽譜を掲示し、音源を聴いて確かめるといふ授業を展開した。その中で、今どこが演奏されているか・次に何の楽器が出てくるかを指し示しながら音源を再生した。子どもからは「あ、本当だ」「え、聞こえない」「これは分かる」等、どの学級でも次々と反応があった。また、「この琵琶の音聞こえた？」と生徒に問いかけるといった、楽曲内の具体的な箇所を指定する際、掲示に対して差し示すことが可能になった。また、生徒の発言に対し「どれ？」と問い返すことで、発言者以外の生徒にも場所を具体的に確認することができたため、生徒とのコミュニケーションが円滑に進んだと感じている。【資料9】は実際に掲示した写真であり、【資料8】の掲示に授業の進行に合わせて楽器名を追加した。



## (2) 振り返りを通した検証のために

授業の最後の振り返りとして「今日の授業で気づいたことや学んだことを書こう。」を設定していた。しかし、この項目では生徒の記述する内容が定まらず、音色に着目して楽曲を構造的に聴くという本実践の目標が達成されているのか検証が難しいことが問題となった。

そこで、振り返りの設問を「もう一度『平調 越天楽』を聴いて、聴き方がどう変わったか書こう。」と改め、注意を向ける対象がどのように変化しているか考えるように促した。

## (3) 改良した振り返りから得られた、聴き方の変化

### ① 生徒 X のワークシートより

資料 10 生徒 X	
■ステップ5. 竜笛以外の、一番印象に残った楽器	
楽器名	感じとった音楽の特徴 (音楽の感じ・雰囲気・様子)
自分 (吹)物	他の楽器にはない特徴的な音だ、その形(形)で思った。
仲間 (打)物	短めな音が繰り返される。和風な雰囲気が増す。
■ステップ6. もう一度「平調 越天楽」を聴いて、聴き方がどう変わったか書こう。	
打物の音をよく聞くと、全体のリズムを取って、他の楽器を引き立てていると気付いた。	

【資料10】は生徒 X のワークシートの記述の一部である。彼は一番印象に残った楽器として笙を挙げており、その音色を知覚していると考えられる。グループでの交流では、鞆鼓に注目した生徒の記述を書き留めている。そして聴き方の変化として、「打物の音」が「全体のリズムを取って、他の楽器を引き立てている」と気付いたとしている。このことから彼は、知覚した楽器の音同士の間連について考える聴き方へと変化し、全体の中での役割について自分なりに考えていると推測できる。また、グループでの交流の鞆鼓に関する意見が、「打物の音をよく聞く」という聴き方に影響した可能性もあり、他生徒の考えに触れることで、彼の視野が広がったとの見方もできる。

### ② 生徒 Y のワークシートより

資料 11 生徒 Y	
■ステップ5. 竜笛以外の、一番印象に残った楽器	
楽器名	感じとった音楽の特徴 (音楽の感じ・雰囲気・様子)
自分 (打)物	短めな音が繰り返される。和風な雰囲気が増す。
仲間 (吹)物	昔の日本の感じ。神社によく流れている感じ。
■ステップ6. もう一度「平調 越天楽」を聴いて、聴き方がどう変わったか書こう。	
各々の楽器の出してる音の雰囲気、交り早を考えると聴き方が変わった。	

【資料11】は生徒 Y のワークシートの一部であり、生徒 Y と生徒 X は同じグループである。彼は一番印象に残った楽器として鞆鼓を挙げており、グループの交流では、筆箏に注目した生徒の意見を書き留めている。聴き方の変化として、「各々の楽器の出してる音の雰囲気、効果を考える聴き方へ変わった。」と記述しており、具体的な記述ではないものの、知覚した音色が生み出す特質や雰囲気について、またその関わりについて自分なりに考えていることが伺える。

## ③ ワークシートをもとにした考察

ワークシートの聴き方の変化についての記述で、変化が無かったと記入した生徒や、抽象的な内容で変化について記述しているとは考えられないと判断される生徒は、授業対象者115人の内、10人であった。それ以外の105人は、何かしらの変化に関する記述が得られた。多くは楽器の音色の聴き分けを含む記述であり、知覚した音色を抽出しながら楽曲を構造的に聴くことが出ていると考えられる。具体的な楽器名や「楽器の音」という記述が多いことから、「音色の重なり」に焦点をおいた学習活動が達成されたと感じている。

## V 実践を終えての考察と今後の課題

### 1 「音色」に基づく見方・考え方の育成

実習Ⅱにおける実践では、比較聴取の異なる要素を音色に限定することで、音色の違いがもたらす特質や雰囲気について考える授業とした。「テクスチュア」に基づく見方・考え方は、音色や旋律といった要素を複合的に関連させて考えることが求められるため、段階を追うという意味でも、「音色」に限定した比較は効果があるように感じられた。それぞれの楽器の音色にはどのような特徴があるのか、その音色は曲想とどう関わっているのかといった視点は、複数の音色が重なる楽曲と向き合う際に基礎として働くと思える。

実習Ⅲにおける実践では、「音色の重なり」に焦点化するための授業を検討した。複数の楽器の重なりによって構成される「平調 越天楽」を、全体的に俯瞰した聴き方から、構成される楽器それぞれの音色に注意を傾ける聴き方へと誘導することで、構造的に楽曲を聴くことを目的とした。これは単なる音色の違いに基づいた聴き方ではなく、「音色の重なり」として楽曲を捉える機会となっている。今回は捉えるのみで終わってしまったが、ここから関連を見出す授業を展開することで、楽曲から感じと

った特質や雰囲気をもたらす音や音楽を形づくっている要素の視点を育てることに繋がたいと考える。

## 2 考えられる今後の展開

今回は1時間に限定した授業実践であるが、もし続きの授業が出来るのであれば、どのように展開するかについて述べる。今回は、楽曲に用いられている楽器とその音色を知覚し、音色の重なり視点で構造的に楽曲を聴くことが主な目的であった。鑑賞分野の出口は、知覚・感受したことをもとに、曲や演奏に対する評価とその根拠を考えることであり、批評文の作成が望ましいと考えられる。「白鳥」の時と同じように、2つ以上の楽器を選択し、その重なりについて述べることを指定した批評文の作成としたい。そのための根拠を明確にするための授業展開として、各楽器が楽曲の中でどのような役割もっているかを想像し、意見を交流する場を設けたい。【資料10・11】にもあったように、他の楽器との関わりや効果について考えたという振り返りを題材に、具体的にどのような効果が生まれているのかを考える授業を設定したい。今後「越天楽」を扱う際に、最低でも2時間は確保して、この実践を行いたいと考える。

## 3 鑑賞領域における効果的な手立て

実習ⅠからⅢまでの授業実践を通して、それぞれで得られた結果や課題について考察してきた。筆者が授業実践の中で実感できた効果的な手立てについて以下のようにまとめる。

- 楽譜等の視覚的な情報を掲示することで、意見交流を具体的に進行することができる。
- 楽曲を構造的に聴くための手段として、楽曲を声部ごとに分けて聴くだけでなく、旋律を声に出す、声部の数を数えて予想するといった、聴くのみで終わってしまわないような活動を取り入れる。
- 意見の交流の際に、他者の意見を記入する欄を設けることで、自分とは違う考え方を受け入れ、新たな見方の材料とすることを支援する。

これらについて、鑑賞領域における効果的な手立てとして今後の授業にも取り入れつつ、新たな課題と向き合っていきたい。

視覚的な情報については、必要なものと不要なものを吟味し、より効果的に働くようなデザインを、それぞれの單元ごとに追求していく必要があると感じている。また、視覚情報に頼りすぎてしまうことで、本質である聴く力の

育成の妨げとなってしまうことにも留意しなければならないだろう。安易に掲示すれば良いのではなく、子どもの思考を育てつつ授業を効果的に進めるための手段として、今後も様々な実践に取り組んでいきたい。

鑑賞領域で取り入れる活動は、今回取り組んだもの以外にも様々なものが考えられる。活動によってアウトプットすることの効果やその目的について検討し、子どもが音楽的な見方・考え方を働かせるための選択肢をこれからも増やしていきたい。その際、意見の交流のあり方・その記録の仕方についても検討し、他者と協働して学んでいくための授業展開の改善に取り組みたい。

## 4 表現領域との関連の強化

本研究では、鑑賞領域に限定した授業改善について考察してきたが、音楽的な見方・考え方は表現領域においても求められるものであり、また各領域での学びは関わりあっていることが望ましい。鑑賞と表現の学びが相互に影響し合い、効果的に関わるカリキュラムの設定が年間を通して、あるいは学年間を通して必要である。これから授業実践を重ねていく上で、表現領域と鑑賞領域との関連を重視し、音楽的な見方・考え方の働く授業づくりを続けていきたい。

### <引用・参考文献>

- ・小島律子(2015)『音楽科 授業の理論と実践』あいり出版
- ・小島律子(2011)『子どもが活動する新しい鑑賞授業』音楽之友社
- ・新山王政和(2011)『改訂版 新しい視点で音楽科授業を創る！』スタイルノート
- ・日本学校音楽教育実践学会(2010)『生成を原理とする21世紀音楽カリキュラム』東京書籍
- ・文部科学省(2017)『中学校学習指導要領(平成29年告示)解説音楽編』東洋館出版社

### <付記>

本研究を進めるにあたり、ご多忙の中、快く実践の場を与えてくださった実習校の先生方や学級の生徒に心から感謝申し上げます。また担当教員である新山王政和先生をはじめ、教職大学院の先生方にも多くのご助言をいただきました。深く御礼申し上げます。実習校で過ごした時間や指導していただいた経験を還元できるよう、初心を忘れず今後も努力し続けていきます。